

## ワークショップ

# 現代医学における漢方治療の応用

### 司会のことば

寺澤捷年

富山医科薬科大学附属病院和漢診療部

昭和51年に漢方エキス製剤が大幅に保険薬価基準に収載され、その後の追認分を含めて現在147処方薬が医療の場で用いられている。近年の医療統計によると、漢方製剤の医薬品総生産高は全医薬品の2.3%に達すると記されている。また、わが国の臨床医の約70%が何らかの形でこの種の漢方エキス製剤を用いた経験があるとも報じられている。

富山医科薬科大学は国立大学としては唯一の和漢薬研究所を持ち、また、附属病院には和漢診療部が設置されている特色ある大学である。本学は和漢薬の基礎的研究と臨床的研究において、わが国の先端を歩む教育機関としての任務を負っている。

その意味で、第33回富山医科薬科大学医学会学術集会のワークショップの主題として「現代医学における漢方治療の応用」が取りあげられたことは誠に喜ばしいことであった。

幸いにも演題募集に対し10題の応募を頂いた。その中にはインドの伝統医学であるアーユルヴェーダ医学に関連したものがあるなど多彩なものとなっている。また、特別講演は富山県立中央病院の今田屋章先生による「慢性関節リウマチの和漢薬治療」が

行われた。特別講演を含めて、このシンポジウムの内容を特色づけるものは、近代医学の診断・治療技術を駆使しつつ、そのみでは解決しえない困難な医療状況を漢方医学やアーユルヴェーダ医学の手段を併用することによって解決しようと言う点にあるものと考えられる。まさしく筆者が新たに提唱している「和漢診療学」が各論的に呈示された点に最大の意義がある。

インド生まれの英国人作家 Kipling は「東は東、西は西、両者の出会うことあらじ。」と東西の哲学と西洋のそれとが、基本的に全く異質なものであることを詩に詠じた。なるほど両者の拠って立つ哲学的な基盤は全く異質ではある。しかし、病める人間を癒そうとする点においては東西の両医学は共通している。双方の哲学的基盤を統一することははなはだ困難ではあるが、一人の患者に対峙したときに、双方の医療技術をそれぞれの見地からこれらを応用し、一個の患者という場において両者を統合することは可能である。今回のワークショップの意図と意義は正にここにあると考える。